

山西省絳県太陰寺の金代木彫像について

中国の宋・金・元時代の木彫像は多数伝存しており、その多くは山西省で制作されたとされる。しかし、惜しくもこれらの木彫像はほとんど海外に流出し、本来の安置地に関する歴史的・地理的情報が失われている。そのため、これらの木彫像の造形、構造、技法、作者などに関する研究は依然として十分に行われていない。

山西省運城市絳県の太陰寺は、「趙城金藏」の経版が彫造された地として知られている。本発表は、太陰寺の大雄宝殿に安置されている4体の金代木彫像（菩薩三尊坐像と釈迦涅槃像）に注目し、それらは、当初の安置場所に伝存している山西省南部の金代木彫像の重要な基準作例であることを論証したい。

具体的には、まず現地調査の成果に基づき、現存4体の木彫像の基本的情報を述べる。

次に、太陰寺に現存する「華山太陰寺澍公菩薩行狀」（元・至元28年〔1291〕）、「雕藏經主重修太陰寺碑」（元・大徳元年〔1297〕）などの碑文史料を分析し、慈雲とその弟子の法澍、法満などによる寺院の建立から、木彫像の制作および焼失から再制作に至る経緯を解明する。それによれば、慈雲らによって太陰古寺の旧址に太陰上寺が建立され、金・大定20年（1180）に「法堂仏殿」「厨屋僧廊」および「釈迦臥仏」「弥陀三士」が完成したが、兵火により金・貞祐2年（1214）に太陰上寺が焼失したという。そして、金・泰和2年（1202）頃から太陰下寺（現在の太陰寺）の造営が始まったと推定でき、「華山太陰寺澍公菩薩行狀」によれば、太陰上寺が焼失した後、法澍が仏師「賈公」に「三大聖像」を再び造立させ、その後兵乱があったものの、金哀宗の壬辰年（1232）に法澍が「華山下寺」（太陰下寺）を再興し、聖像も保存され、特に賈公作の「三大聖像」が1291年の時点で太陰下寺に存在していると考えられる。

続いて、各像および釈迦涅槃像の厨子に書かれた墨書、各像の造形的特徴および放射性炭素年代測定（C14）による結果を総合的に検討する。それによると、現在太陰寺の大雄宝殿に安置されている菩薩三尊坐像は仏師「賈公」によって造立された「三大聖像」にあたる可能性が高く、金・貞祐2年（1214）から金哀宗壬辰年（1232）頃までの間に制作されたものであると考えたい。なお、現存の釈迦涅槃像について、詳細は不明だが、太陰上寺当初の「釈迦臥仏」にあたる可能性もあると推定する。

最後に、太陰寺菩薩三尊像の頭部に触れておく。現在の三尊像の頭部はいずれも後補である。発表者は、中国と欧米に所蔵されている宋・金・元時代の木彫菩薩像の頭部を整理した結果、現在北京故宫博物院の2点およびアメリカ・ナルソンアトキンス美術館の1点の各菩薩像頭部は太陰寺三尊像の首の切断面および構造技法などの特徴に一致しており、元々太陰寺三尊像の頭部にあたる蓋然性が高いと指摘する。